

2020年ドバイ国際博覧会日本館基本計画検討会（第2回）-議事要旨

日時：平成29年12月26日（火曜日）16時00分～18時00分

場所：経済産業省本館第一特別会議室

出席者

・委員：

彦坂座長、内田委員、江村委員、キャンベル委員、齋藤委員、澤田委員、吉川委員

・幹事省：経済産業省

・副幹事省：総務省、文部科学省、農林水産省、国土交通省

・参加機関：独立行政法人日本貿易振興機構（JETRO）

議事概要

1. テーマ案について

①日本館のテーマ案について意見交換

2. 展示・運営等のあり方について

①JETROより日本館基本計画策定に向けてのチャレンジ分野等について説明

②齋藤委員より展示のあり方について説明

③展示・運営等のあり方について意見交換

委員からの主な意見は以下のとおり。

①ドバイ博における日本館のテーマの設定に関して

- ・人とAIが共存する世界を、日本はどのようにして作るか。そこを議論することによって、テーマも見えてくるのではないか。今は無意識のうちにAIやサイバー等と繋がっている。
- ・マテリアル（ものづくり）がAIやIoTといった技術の発展の支えとなっているが、マテリアルは日本の強み。その強みを日本の独自性として発信できないか。
- ・技術がどう未来を切り開いていくか、ということを日本館で発信していったらどうか。
- ・まだテーマに日本の独自性がうまく浮き出てきていない。日本は課題先進国であり、その課題解決に関するケーススタディーとして注目されるテーマ・展示であるべき。
- ・100年人生時代が議論されているように、世界がこれから直面していくであろう問題を日本はすでに抱えている。その問題の解決に向けて日本はどのようにアプローチしていくか、を提示することが大事。
- ・世界を驚かせるようなコンテンツを考えてから具体的なテーマを決める流れと、テーマを決めてからその表現手法を考える流れ、両方ありうる。日本としてどのような読後感を与えるか、テーマと素材と手法を一体として、自由度をもって検討する必要あり。

- ・ミラノ万博のテーマは「Harmonious Diversity」だったが、3つ目の案の「美しい調和」はこれに近い。ミラノから受け継ぎ、連続性のあるテーマとしてもよいのではないか。
 - ・「営み（日々の暮らし）」と「産業」を一緒に考えるのが日本らしさ。おもてなしの心や人柄が技術に組み込まれていることが日本の強み。日本の精神とモノの文化が一体になって表現されているもの、を日本の象徴として見せるべき。
- ・3つのテーマ案はそれぞれに似ている部分がある。一つを選ぶのではなく、例えば二つのテーマを繋げることで新しい発想が生まれるのではないか。
- ・異なる2つの視点をつなげるのもよい。例えば「調和と革新」とか。
- ・日本の「和」というのはいろんな要素を含み、かなり抽象的である。「和」を解体し、モノの文化と精神文化の結節点として具体的に発想すべき。
- ・3つのテーマ案はどれも日本が世界に共有できる知見。ドバイの人達に、知ってよかった、これからドバイでも導入できる技だ、と思ってもらえるようなテーマ設定が大事。
- ・日本では万博のたびに日本のテーマをどうしようという議論が行われているが、毎回テーマを変えない国がほとんど。テーマを継続的に使用してもいいのではないか。
- ・テーマは問題の解き方(How)。災害や高齢など、視覚的に世界的に共有できるモノ(What)を決めて、アプローチしては。

②展示・運営等のあり方について

- ・世界のトップを走る日本人を各分野から集め、オールジャパンでの共創をしていくべき。その際、すでに有名なものではなく、これからスタンダードになり得る才能を発掘するべき。
- ・これからの才能を考え、若い人を参加させるべきである。キュレーションチームを設けるなど、展示などに関わっていく人に次世代を引っ張り上げる仕組みが必要ではないか。
- ・展示と建築、運営を一つの塊として考えることが大事。それらの基本的な構想が作られて初めてキュレーションが成立する。
- ・万博が加速器となるよう、人選については真剣な話し合いが必要。
- ・齋藤委員プレゼンの「PROCESS」に同感。おもてなしは待つことから始まる。日本のプロセス（過程の解剖、からくり）を見せるのもよい。待っている間にも様々な体験をできる展示にするべき。
- ・産業も文化の一つであるから、日本の産業を発信するプレゼンテーションの場を設けるのはどうか。日本の産業が日替わりで楽しめるなど、展示を工夫する必要はあるが。
- ・展示には驚くべき事実がないと人々の心は開いてくれない。
- ・お雑煮にも色々あるように、日本は地域によって様々な文化・風習の違いがあり、それが相互的に高め合いバランスをとっているところに日本らしさがある。そこを世界に納得させるような展示にしてはどうか。

- ・日本館を見た人が発想を広げて、日本人像を作っていけるような素材を見つけ、見た人の心を打つ、作品性の高い展示にしていきたい。
- ・デザインされたとおりにパビリオンを見ることから、一人一人が違う体験をできるパビリオンデザインも可能になるのでは。頭ではなく、心を満たす展示を。

お問合せ先

商務・サービスグループ 博覧会推進室

電話：03-3501-0289

FAX : 03-3501-6203